

近代朝鮮におけるナショナリズムと 「シンボル」の変遷に関する一考察 — 独立協会の解散以後の独立門をめぐる —

金 容 賛

目次

はじめに

第1章 徐載弼の啓蒙活動と独立門の建設

第2章 独立協会の政治活動と解散以降の動向

第1節 「自主独立」をめぐる君権と民権の対立

第2節 旧独立協会のメンバーとその協力者

第3節 尹始炳の再起と日本政府の支援

第3章 政治情勢の変化と「シンボル」の変遷

第1節 一進会の結成と大韓帝国政府の弾圧

第2節 独立館基址の獲得と「独立」なるスローガン

第3節 三・一運動の「自由独立」と独立門

第4章 朝鮮総督府の「文化政治」と独立門の役割

おわりに

はじめに

朝鮮半島において「独立」という言葉は何を意味するのであろうか。それは、南の大韓民国にしても、北の朝鮮民主主義人民共和国にしても、大日本帝国による植民地統治から解放を意味する「自由独立」として受けとめられているという点では共通であり、さらに、南北統一という「民族的課題」として受け継がれている言葉である。それでは、朝鮮半島において「独立」とは、大日本帝国からの「自由独立」を意味すると一様に語ることができるのか。他方で、「自

由独立」が存在しなかった日韓併合以前の朝鮮半島では、「独立」をどのように捉えていたのであろうか。この問いについて答えていくために、本稿では、「独立」を記念する建築物として現存する独立門を注目したい。

前稿の「近代朝鮮におけるナショナリズムと『シンボル』の機能に関する一考察」では、独立門が建てられた背景と独立協会の政治活動に注目し、大衆の素朴な不満や怒りを大衆運動に関連付けて組織していく過程のなかで、シンボルがどのような役割を果たしたかについて、「下から」のナショナリズムの観点から考察した¹⁾。ここで改めてシンボルなる概念を確認すると、それはコミュニティの内部における一つのコミュニケーションの手段であり、人々の感情を揺り動かして集団意識に正当性を付与することによって、集合体に凝集性と持続性を生成させる、イデオロギー的機能を有するものである²⁾。前稿では、独立門が独立協会の活動の正当性を訴えるコミュニケーションの手段として利用されていたことと、それが記念する「独立」の意味を明らかにすることができた。その結果として、独立門に付与されていた意味が独立協会の解散によってどのように変化していったのかという課題が明らかになった。

したがって、本稿はかかる研究の一環として位置づけられるものである。独立門の全体像に関する先行研究は、歴史的な価値を強調した^{シン・ヨンハ}慎鋪廈の研究と、既存の研究の補完および修正に重点を置いたキム・セミンの研究があるが、独立門を維持管理する個人や組織の変化、そして情勢の変化による「独立」の意味の変遷過程についてはこれまで注目されてこなかった³⁾。こうした先行研究の状況を踏まえ、本稿ではかかる概念装置を援用して、独立門が、いつ、誰によって、何のために、建てられたのか、また、これまでの政治情勢の変化のなかで、誰によって、何のために、それが維持管理されてきたのか、そこに込められている様々な「独立」について考えていく。

第1章 徐載弼の啓蒙活動と独立門の建設

独立門が建てられたその背景を、当時の国内外情勢から整理しておきたい。1895年6月2日、国王高宗は、朝鮮全国の「臣民」に対して独立の喜びを分かち合えるよう、独立慶祝日を定めることを命じた⁴⁾。日清戦争が日本の勝利に終結して結ばれた日清講和条約(1895年4月17日)は、「大清國確認大朝鮮國係獨立自主之邦」⁵⁾と、朝鮮が完全なる独立自主の国であることを明確にさせた瞬間であった。当時の明治政府にとって、朝鮮とは、死傷者およそ18,000人⁶⁾という犠牲を出してまで獲得せざるを得なかった戦略的に最も重要な「利益線」⁷⁾であったと言えよう。だが、戦勝国となった日本の喜びは数日も経たず、更なる「他者」の接近から「利益線」を守る体制を構えることとなる。日清講和条約において、日本が清国に要求した「遼東半島の割譲」の条項は、南下政策を展開していたロシアにとって妨げとなるがゆえに、ロシア

は、フランスとドイツの力を借りて遼東半島を清国に返還するよう、日本に対する三国干渉を起こしたからである⁸⁾。日本とロシアが、三国干渉を通じて互いの対東アジア戦略を確かめた以上、朝鮮は、二つの帝国が本格的に牽制していく国際情勢のなかに巻き込まれることになる⁹⁾。

一方、朝鮮国内では、日清戦争の勃発とともに日本に協力的な開化勢力による政権が登場することとなり、それまで清国に依存しつつ封建的であった守旧勢力に対して、民主的で革新的な開化勢力が優位となる転換期を迎えた。だが、開化勢力のなかでも、親米・親露の傾向が強かった貞洞派は、急進的な改革を行なう新政権と、その背後にいる日本を警戒していた。激しさを増す両派間の対立は王妃殺害事件である乙未事変(1895年10月8日)を招いてしまったが、これは朝鮮に接近するロシアを牽制し、日本に協力的な当時の政権を保護するための、明治政府の一つの戦略であったと考えられる¹⁰⁾。このような不安定な国内情勢のなかで、改革による社会的・政治的な近代化は次々と進められていったのである。

1884年の甲申政変に失敗して、亡命先のアメリカで市民権を取得していた徐載弼^{ソ・ジェビル} (Philip Jaisohn) は、甲申政変の同志で日本に亡命していた朴泳孝^{パク・ヨンヒョ}と親日政権の要請に応じて、政府の諮問機関である中樞院の顧問となる。彼がアメリカから入国して間もなく、王妃殺害事件とその後の断髮令の施行による反発で乙未義兵運動が起こった。貞洞派は、その騒乱を狙って国王と王太子をロシア公使館へ避難させる俄館播遷に成功したことで、親日政権を倒して親露・守旧勢力による政権樹立を果たした。

日清戦争によって、清国と朝鮮との従属関係が壊されるとともに、朝鮮をめぐる日本とロシアの対立が深まっていくなかで、徐載弼は、他国に依存しない自立した国家をつくるために、「自主独立」¹¹⁾を掲げて、独立新聞を発刊して大衆世論を形成していく啓蒙活動に着手した¹²⁾。彼が構想する啓蒙活動のなかには、その他に、「永久的建設、すなわち公園や大衆建物、または公衆大路のようなものを建設して『独立』と命名し、その『独立』という言葉が朝鮮の人々の心に深い印象を与えるように」¹³⁾と、「独立」を象徴する記念物を建てる計画も含まれていた。「新聞だけでは、大衆に自由主義・民主主義的改革思想を鼓吹することが困難のようだ」¹⁴⁾と判断した彼は、貞洞派と協力して「朝鮮人民を有意義な学問で教育させて自主独立する心を抱かせよう」¹⁵⁾という目的で、独立協会を結成した。独立協会のメンバーの協力と新聞広告による募金活動を通じて、独立門を建設する事業が実現可能となったのである¹⁶⁾。

かくて、多くの協力を得て建てることのできた独立門であるが、その定礎式(1896年11月21日)における徐載弼の演説によると、独立門を支えることとなる複数の石に例えて「国も大小人民が各自職務を尽くすことによって国が永久に独立となる」¹⁷⁾と、「独立」を実現する方法として政府と民間の協力が重要であると強調した。定礎式に集まった約6,000人の群衆に対して、徐載弼自らが掲げる「自主独立」を独立門に例えて直接訴えた瞬間であった。

独立門の定礎式の招待状と、完成した独立門の二つの碑文の下には、スモモの花が描かれて

いるが（写真1、写真2を参照）、スモモの花とは、朝鮮王朝を、後に大韓帝国の皇室を表わすシンボルである¹⁸⁾。ここで考えられることは、徐載弼の啓蒙活動は、民権高揚とともに、忠君愛国を強調することも重んじていたことである。「自主独立」を実現するためには、従属国の君主であった国王が他国の首脳と対等な地位であることを明確にする必要があるが、そこで国王の地位の向上は、同時に国民の地位の向上にもつながると、徐載弼は考えていた¹⁹⁾。しかし、彼は、「朝鮮の人民たちは、愛君することが正しいことであるとは知っているものの、どうすることが真の愛君なのかは知らない」と、国王に対する人々の意識の低さを懸念しており、国王を愛するためには、(1) 国王より上位の国を作らないこと、(2) 国王の安寧を守ること、(3) 国に思いや争いなく国の基礎を持続させること、(4) 国王と国民の間に正義が生まれるようにすること、と述べている²⁰⁾。ここで注目すべき点は、「これは官員の職務であり、その他の人民は自分の職務を行なって（後略）」²¹⁾と、忠君を訴えるその対象は、主に政府官僚や公務員に向けられていたことである²²⁾。

写真1. 独立門に刻まれたスモモの花



出典：筆者撮影〔撮影日：2016年3月26日〕

写真2. 独立門定礎式の招待状



出典：『東亜日報』, 1930年1月14日, 3面より引用。

朝鮮王朝における権力行使は、国王よりは官僚の判断が重んじられた政治構造であったがゆえに、官僚が自分の私欲を満たすために権力を利用することも可能な構造であったと言える。したがって、権力を求める党派間の争いは途切れることがなく、国王は、権力において優位となる政治勢力の正当性を担保する存在へと転落してしまった。それゆえ、それまでとは異なる変革のムードのなかで、国王の権威を高めるために、現状に対する批判的な立場から忠君を説いて政治の安定を図ろうとした徐載弼の狙いが伺える。すなわち、忠君愛国を強調していた徐載弼にとって、国王の存在は、朝鮮の国内外政治を安定化させるシンボルとして捉えていたと言えよう。だが、このような徐載弼の政治的干渉を警戒していた親露政権は、彼を中枢院顧問

から解任するとともに（1897年12月14日）、彼をアメリカに送還することに成功した²³⁾。徐載弼が朝鮮を去る日（1898年5月14日）、徐載弼は彼を見送るために集まった人々に対して、「諸君は、大韓独立の基礎を固め、君主に忠誠し、二千万同胞兄弟を愛して、大韓自主の権利を整え、国を支えて富国とし、勇猛の心で、国のために死ぬ覚悟で、今後世界万国から同等な扱いを受けるように、二度と外国人に侮られないように」²⁴⁾と告げ、彼の啓蒙活動はわずか2年余りで幕を閉じることとなった。

第2章 独立協会の政治活動と解散以降の動向

独立門と独立館が位置する独立館基址は、徐載弼の送還以降も、引き続き独立協会が活動の本拠地としてこれを利用していった²⁵⁾。独立協会が解散されてからは一時的に国有化されるものの、独立館基址は、日露戦争が勃発して登場する一進会の本拠地として再び利用されることになる。本章では、徐載弼の啓蒙活動以降の独立門に注目するために、独立協会の政治活動では、「自主独立」をどのように捉えて運動を展開していったのかを考察し、また、解散後の独立協会のメンバーの動向に着目して、一進会が結成されるまでの経緯を探ってみたい。

第1節「自主独立」をめぐる君権と民権の対立

王妃殺害事件以降の混沌した政局のなかで身の危険を感じてロシア公使館に逃れていた国王であったが、一年間の滞在を経てロシア公使館に隣接する慶運宮へ還宮することができた。親露政権は、1897年10月12日、ロシアの力を借りて「自主独立」を強化する国づくりを目指し、国号を「光武」とした大韓帝国の成立を宣言した。ここに、大朝鮮国の国王高宗は大韓帝国の光武皇帝となった。皇帝即位式の会場の様子を詳細に報じた『独立新聞』は、「朝鮮檀君以来初めて、皇帝の国になったがゆえに、この歓喜を朝鮮臣民たちは純粹に受け止めるであろう。（中略）個々人が自主独立する心を固く抱いて（中略）朝鮮が他国を頼りにするなり、他国より下の扱いをされないようにすることが、王国が皇国へと変わっていく道標であろう」²⁶⁾と、大韓帝国の成立を祝いつつも、一方では「自主独立」の実現に向けて人々の意識を喚起したのである。

俄館播遷を契機に、ロシアに対する国王の信頼が高まったがゆえに、軍事教官や財政顧問の派遣など、大韓帝国の内政においてロシアの関与は拡大していった。当時、駐韓ロシア公使であったアレクセイ・ニコラビッチ・シュペイエル（Alexey Nikolayevich Shpeyer）は、「徐載弼の新聞はアメリカの新聞で、独立協会・独立門・独立公園のようなものはすべて無意味である」²⁷⁾と、徐載弼に対する警戒心を露骨に表わしていた。自らの力で独立を実現していくと「自主独立」を掲げていた徐載弼と独立協会にとって、外国人顧問の雇用とは内政干渉に発展し得

る可能性があったがゆえに、大韓帝国と友好関係にあったロシアでさえも、警戒すべき対象であった。

かくて、『独立新聞』の「論説」では、顧問派遣をめぐる情勢変化と、それに関する声明が頻繁に掲載されていた²⁸⁾。特に、1897年11月16日の「論説」では、大韓帝国の外部大臣とロシア公使が、財政顧問の派遣に関する条約を11月5日に締結したことについて、条約文の全文を掲載するとともに、11月18日の「論説」では、条約文を詳細に分析しつつ、両国の官僚と現状に対する関心を示さない大韓帝国の国民に対して猛烈に批判を展開したのである²⁹⁾。当時において、革新とも言える言論の力を用いた政治批判は、徐載弼の中樞院顧問の解任とアメリカへの送還からもわかるように、当時の政府官僚や外国の公使に対して打撃を与えるほどの影響力を持っていたのである。

徐載弼の啓蒙活動の成果と言えば、独立新聞の発行と定期的に開催した討論会によって定着しつつあった、大衆世論の形成が挙げられる。この討論会の詳細について調査・考察した^{ハン・フンス}韓興壽の研究によると、討論会は合計31回開かれ、そのうち富国論が7回、安全保障が6回、国民教育が5回と、主に政治的話題が中心であった³⁰⁾。1898年2月22日、討論会の開催と同時に、独立協会では、ロシアの内政関与の問題について上疏することを満場一致で可決され、会長の^{アン・キョンス}安駒壽³¹⁾を代表にして光武皇帝に上疏を提出した³²⁾。その後、政府から何の改善策も提示されなかったことから、独立協会は別の策として、ロシアの内政干渉を許した政府の政策決定の撤回を要求する万民共同会を開催したのである³³⁾。この集会の結果として、独立協会の要求を受け入れた政府は、ロシアの軍事教官と財政顧問を送還させることになる³⁴⁾。これは、独立協会だけではなく、彼らを支持する大衆がいたからこそ達成できた成果である。万民共同会による人々の政治参加を通じて、大衆世論が国政に反映されたこと、大衆の力によって国家政策を転換させたことは、徐載弼が志向していた「民主主義的改革」への一歩前進であったと言える。

独立協会と討論会が政治活動へと転換されていくなかで、それまで独立協会のメンバーであった貞洞派は脱退し、その一方で、政治に不満を持つ、または独立協会を利用しようとする勢力が独立協会に加わることとなった³⁵⁾。送還された徐載弼に代わって、独立新聞と独立協会における主導的な役割は、彼を支援していた^{ユン・チホ}尹致昊が担うこととなる。彼は、新しい独立協会の結束を固めるために「議院を設立することが政治上一番の要務」というテーマで討論会を開催し、また「自主独立」を築いていく目標として、中樞院を議会に昇格させて参政権獲得を目指す議会設立運動を展開していく³⁶⁾。しかし、独立協会による「立憲君主制の導入」と、政府による「専制君主制の維持・強化」は、たとえ「自主独立」という政治目的を共有していたとしても、それを実現していく方法をめぐっては妥協できる段階には至っていなかったのである³⁷⁾。かくて、議会設立運動は失敗に終わって、独立協会は解散を余儀なくされた。主要

幹部は犯罪者と見なされ、独立新聞は廃刊され、そして独立館基址は国有化されることになった³⁸⁾。

第2節 旧独立協会のメンバーとその協力者

独立協会の解散以降、独立館基址がどのように一進会の所有となったのか、従来の研究では、その詳しい経緯について必ずしも明らかにされてきたわけではない。この節では、独立協会の幹部であり万民共同会の会長であった尹始炳ユン・シビョンに注目して、彼の動向を通してその経緯を探ってみたい³⁹⁾。独立協会の解散直後、日本人の住居で逃亡生活をしていた議会設立運動のメンバーチュ・ジョンドクの崔廷徳は、旧朴泳孝邸にて爆弾テロによる民会の再建計画を企てていた。だが、製造中の爆弾が爆発する事件が発生し、これを機に崔廷徳は日本に亡命した⁴⁰⁾。当時の日本では、朴泳孝を中心に開化勢力の亡命者集団が結成されていた。亡命者集団について研究した文一熊ムン・イルウンによれば、解散後の独立協会のメンバーによる爆弾テロ未遂事件は、亡命者集団と直接的な関係はなかったものの、亡命者集団にとって帰国を実現して政治活動を再開する展望を与えるものであったと評価している⁴¹⁾。

この事件を契機にして当時の外務大臣であった青木周蔵は、さらなるテロやクーデタの兆候を把握するために、駐韓日本公使の林権助に対して、慶運宮を護衛する侍衛隊が政変を起こす兆候があるのかという具体的な調査を依頼していた⁴²⁾。だが、林権助は、そのような兆候はないことから、その具体的な情報の出所について青木周蔵に問いただしていた。これに対して、青木周蔵は、その情報は亡命していた安駟壽からのもので、陰謀の発端は朴泳孝にあり、崔廷徳と尹始炳の紹介から侍衛隊の将校が係わっていると回答していた⁴³⁾。実際、こうした兆候が現実のものになることはなかったが、これらの書信のやり取りで明らかなことは、亡命中の朴泳孝が、安駟壽や崔廷徳、そして尹始炳といった独立協会の元幹部と係わりがあったことである。実際のところ、日本に亡命した崔廷徳は尹始炳とともに朴泳孝がいる神戸の須磨に滞在しつつ、安駟壽などの亡命者とも交流していた⁴⁴⁾。

尹始炳が日本に渡航する頃、大韓帝国政府は安駟壽に対して条件付きの帰国許可を出していた⁴⁵⁾。それに伴い、安駟壽は1900年2月1日に帰国して自首することになり、彼の安全を確認した尹始炳も、同年の5月3日に帰国した⁴⁶⁾。だが、自首して半年も経たないうちに、安駟壽は、王妃殺害事件と加担していたことが主な罪状で処刑されてしまうことになる⁴⁷⁾。大韓帝国政府のこのような処分は、文一熊が指摘しているように、亡命者に対して寛大な措置を取らないという強い意思表示であった⁴⁸⁾。さらに、1899年8月17日に制定した「大韓帝国制」⁴⁹⁾からも読み取れるように、この処分は、反政府・反守旧勢力が組織される可能性を防ぐための措置であると同時に、亡命者を利用しようとする明治政府に対する牽制でもあったと考えられる。かくて、議会設立運動の失敗後の尹始炳は、朴泳孝を中心とした協力者との会合を通

じて政治活動の再開を図りつつ、親露政権の強硬政策のもとでその好機を待たざるを得なかったのである。

第3節 尹始炳の再起と日本政府の支援

尹始炳が再起するその好機とは、それほど長くかかるものではなかった。日露戦争が切迫してきた1903年の冬に、彼は日本の支援を期待して民会の結成を企てるものの、日本公使の林権助が大韓帝国政府に通報することでその計画は失敗に終わる⁵⁰⁾。その後の彼の動向について、朝鮮後期の士人であった黄^{ファン・ヒョン} 玟^{ミン}によれば、「ソウル市民が保安会を設置して尹始炳を会長として推戴した」⁵¹⁾と述べており、また、神鞭知常の秘書であった西原亀三によると、「尹始炳が保全会というものを拵えて、大分人を集めたけれども、或る一時の弾圧に遭って駄目になってしまった」⁵²⁾という証言がある。なぜ、彼は、政治活動の再開のために日本の支援を求めているのか。また、保安会（もしくは輔安会とも表記する）なる組織は、彼とどう関係があったのか。この節では、保安会の活動背景から、尹始炳の動向を探ってみたい。

日露戦争が勃発して大韓帝国に対する政治的主導権が著しくロシアから日本へと変わりつつあるなかで、林権助は、外務大臣の小村壽太郎に対して「韓國ノ經營ニ關シ最モ有利ニシテ且最モ容易ナルハ未耕地ノ開墾ニ有之候處右未耕地ノ開墾ハ之ニ要スル資本及設計ノ點ニ顧ミ韓人ニ一任致候テハ到底其希望ヲ達シ難ク必ス我邦民ノ手ヲ借ルヲ必要ト致候」⁵³⁾と、大韓帝国の経営に関する意見とそれをめぐる日本人の移住について提案し、実行に移していた。このような提案は大韓帝国政府にとっては受諾できるものではなく、1904年の6月から「荒蕪地開拓の利権問題」として日本に対する不満と排日の世論が高まっていくことになる。これを契機にして、日本による荒蕪地開拓に反対することを目的とした保安会が7月13日に結成される。保安会は、早速日本に抵抗することを訴える激文を全国に配布して、7月21日にはソウルにおいて3000人を上回る大衆集会を開いた⁵⁴⁾。政府を代弁するような役割を果たす保安会であったがゆえに、政府からの弾圧や解散命令は出されなかったものの、反日世論が高まることを警戒していた明治政府は、大韓帝国の政府に対してその対応を求めつつ、憲兵隊を動員して首謀者とされる人物を連行する形で反対運動の鎮圧に乗り出すことになる。

大韓帝国における民会の結成および活動は、それまで政府が厳しく規制していたゆえに、保安会の集会は、独立協会以来はじめて開かれたものであった⁵⁵⁾。その運動の性格が日本に対する反日的な抵抗であったことを考慮すれば、慎鋪廈が評価するように、日本を主たる他者と捉えて国権恢復を目的とする「愛国啓蒙運動の始まり」と捉えることができる⁵⁶⁾。それでは、万民共同会や議会設立運動のように、権力獲得を目的として立憲君主制の支持と民権高揚を訴えていた尹始炳が、保安会の幹部から会長に推戴されたとしても、なぜ、保安会のような反日的で保守的な政治団体へ関与することが可能であったのか。

独立協会の幹部であった鄭喬ジョン・ギョによると、「尹始炳は、独立協会が解散されてから常に心のなかで不平と不満を抱いていた」⁵⁷⁾と述べている。尹始炳が抱いていたと思われる不満とは、第一に、議会設立運動の失敗であり、第二に、民会の再建を妨害する政府の弾圧であろう。要するに、彼の不満は、権力獲得という目標を達成できなかったことにありと考えられる。すなわち、政治活動を再開するためには政府からの弾圧を防ぐ必要があるがゆえに、日本の支援は欠かせなかったのである。だが、その計画が失敗した以上、別の策として、尹始炳は保安会への関与を一つの選択肢として捉えていたと考える。尹始炳が、万民共同会の会長として皇帝に対する抗議集会を成功に導いたことは、彼にとって、専制政治の体制の下であっても政治を変えることのできる「大衆の力」と、それによる改革の可能性を実感する出来事であった。保安会への関与を強めることは、政府の弾圧から逃れることができ、反日世論を基盤とする大衆からの支持を獲得できるがゆえに、彼にとって再起を可能とする一つのチャンスであったと考えられよう。

しかし、尹始炳が、実際に保安会の会長として活動したとされる公式の文書は発見されていない。彼が保安会の会長として推戴されたとみられる時期は、1904年7月下旬から8月中旬の間であったと推理することができる⁵⁸⁾。だが、その時期とは、尹始炳が、親日的で急進的な一進会を結成した時期でもある⁵⁹⁾。尹始炳の再起をめぐるこの相反する二つの潮流が同時進行で展開した背景には、日本政府を取り込んで活動を再開すべきか、それが不可能ならば、大韓帝国政府との一定の距離を保ちつつ大衆の支持の下で活動を再開すべきかという状況のなかで、一進会の結成という政治的決断に至ったと考えられる。

第3章 政治情勢の変化と「シンボル」の変遷

この章では、尹始炳が一進会の結成を決断した要因に着目し、展開していく一進会の政治活動において「自主独立」なるスローガンが再び浮上してくるのか、あるいは新たなスローガンを掲げることになるのかについて考察を加え、日韓併合以降の独立門の行方を探ることにより、政治情勢の変化に伴う「シンボル」の変遷について考えてみたい。

第1節 一進会の結成と大韓帝国政府の弾圧

日露戦争の勃発とともに韓国駐劄軍の通訳として日本から帰国した宋秉峻ソン・ビョンジュンは、朝鮮半島の視察のために来韓していた日本の衆議院議員の神鞭知常を訪問する⁶⁰⁾。宋秉峻が書いた神鞭知常の追悼エッセイによると、神鞭知常が「朝鮮の独立を保全して名分を正し、日韓両国を真の兄弟関係にするを良策と思惟して居る。帝国は兄分として弟分たる朝鮮を保護し、兄弟互いに相扶け合ふたならば、円満幸福なる過程を保つと共に、外侮をも禦ぐこともできる」⁶¹⁾と

語り、それに共感した宋秉峻は、その目的を貫く機関として団体の設立に対する抱負を語っている。神鞭知常は、民会に対する大韓帝国政府の弾圧と、団員の殺戮の可能性も考えられる当時の状況からして、組織をつくるにはまだ早いと宋秉峻に忠告した。だが、「戦争中が一番好時期」と捉えた宋秉峻は、神鞭知常の忠告を受け入れず「日本軍の大勝を事業の先決問題」とした政治団体の結成を企てることになる⁶²⁾。

宋秉峻には、駐割軍の司令部に人脈はあるものの、国内において政治団体を組織できる基盤がなかった。それゆえ、彼は、日本の支援を求めている尹始炳に接近して、民会を組織すれば駐割軍の支援を受けられると説得する。政治改革という両者の目的が合致したこと、また、独立協会と保安会の活動で築き上げた政治基盤と、外国の軍隊という治外法権に基づいた支援勢力を共有できる補完的な関係から、両者は1904年8月18日に政治団体の維新会を結成した⁶³⁾。結成から二日後に開かれた会合において、会員たちは、政府の命令により派遣された兵士と警察に囲まれて解散を余儀なくされるという事態が発生する⁶⁴⁾。この事態に際して、日本憲兵隊が現れて、大韓帝国側の兵士と警察を説得して維新会の鎮圧を阻止したのである⁶⁵⁾。憲兵隊の協力によって会合を継続できた尹始炳は、維新会と決めたばかりの団体名を一進会と改名し、彼が万民共同会の会長として推戴された白木麿都家（綿布売買を独占する商店の事務所）にて、正式に一進会の会長に選出された。光武皇帝が自ら一进会に対して解散を命じたものの、相次ぐ駐割軍の妨害によって、その命令は遂行できない状況であった⁶⁶⁾。かくて、宋秉峻とともに一进会を結成した尹始炳は、韓国駐割軍からの協力を得たことによって政府の弾圧を防ぐことが可能となり、政治活動の再開を実現したのである。

一进会は、その結成と同時に、政治活動の目標を示すため、第1に、皇室を尊重して国家基礎を固める、第2に、人民の生命財産を保護する、第3に、政治改善を実施する、第4に、軍政財政を整える、といった四大綱領を宣言する⁶⁷⁾。また、全国に趣旨書を配布して大衆の支持を得ようとしていた。この趣旨書の構成をみると、(1) 国家、人民、君主、政府に関する定義、(2) 大韓帝国の10年間の情勢と、政府に対する批判、(3) 一进会の目的と、一进会への支持を訴えるメッセージとなっている⁶⁸⁾。一进会は、独立協会と同様、ソウルを中心に活動していたが、全国各地では、^{イ・ヨング}李容九を中心とする旧東学勢力によって進歩会という組織が結成され、一进会との交流を深めていった⁶⁹⁾。そして、互いの結成の趣旨と目的を確認した両会は、1904年12月2日に一进会として統合し、全国規模の政治団体へと成長していく⁷⁰⁾。

一进会は、進歩会との統合について政府に告知するとともに、新聞に掲載するなど、大々的に宣伝活動を行なった⁷¹⁾。その文書には、日露戦争が日本に有利となった情勢を踏まえた上で、大韓帝国の独立が守られたことは情報に乏しい地方の人すら知っていることであると強調しつつ、日本人の財政顧問と外国人の外交顧問を雇うことを明記した第一次日韓協約を支持すること、北進する日本軍を援助するために鉄道建設の人員を派遣することなど、日本に対する一进

会の政治的立場や方針を明らかに示した。万民共同会を開いてロシア顧問の送還を訴えていた独立協会の政治活動と比較すると、また、日本保護のもとで大韓帝国の独立は守られるという上記の記述から、一進会が訴える「独立」とは、独立協会が掲げていた「自主独立」とは異なる意味で把握されていたのである。

上記の文書の最後にもう一つ注目すべき点がある。それは、大韓帝国政府や他の勢力によって一進会の会員が射殺される事件が多発し、それに対する不満を訴えていたことである⁷²⁾。なぜ、会員が殺害される状況にまで発展したのか。また、どのように一進会の会員であることが識別できたのであろうか。その要因として、一進会は、世界文明国の一員であることを示すために、洋服や帽子の着用と断髪を会員に強要したことが挙げられる⁷³⁾。朝鮮時代において、子供や僧侶を除くすべての男性は、成人となった証としてサントウと呼ばれる髪の手入れ方をしていた。それは、「身体髪膚受之父母」という儒教理念に基づき、親から授かった体と髪を大事にすることが息子としての道理であると重んじられていたからである。それゆえ、その大事な髪を切ることは、当時からすれば常識に反する行為であり、それに対する抵抗は正当な行為として受け入れられたのである。王妃殺害事件と断髪令の施行による反発で乙未義兵運動が起こったように、一進会の断髪も、全国に義兵運動を再蜂起させる契機となって、断髪した会員がその標的となったのである⁷⁴⁾。

それでは、徐載弼と独立協会は、「自主独立」を達成していく上で、断髪をどのように捉えていたのであろう。断髪令の施行に関する『独立新聞』の「論説」によると、断髪そのものに関しては否定しないものの、法令として施行されたことは「開化の根本」ではないと述べるなど、断髪をするかどうかは個々人の自由に任せるべきであるという放任主義的な立場を示していた⁷⁵⁾。したがって、一進会の断髪は、独立協会から受け継いだものではなく、一進会独自の方針に基づくものであったとすることができる。

それでは、なぜ、一進会は断髪をする必要があったのか。その方針に関しては、一進会が結成される前に、一進会の顧問を勤めることになる西原亀三が宋秉峻に提案したものとされている。宋秉峻と尹始炳から民会の結成に関する助言を求められた西原亀三は、独立協会と保安会の失敗例を取り上げ、朝鮮における民間運動は政府の弾圧に対して団結力が欠けていると主張した⁷⁶⁾。彼は、組織の団結力を高めるために、断髪と衣服の改良が必要であると説いたが、それは、「さうやつて置けば、一朝弾圧を被つた折にも、バラバラになることが出来ない、髪を斬つたやつだけ集らなければならぬことになる、これまでのやり方では党人か党人でないかの区別がつかぬが、髪を斬つたら否でも応でも一緒に来なければならぬ、生命に関する問題も起つてくるから、さうなれば或は行けるかも知れない」⁷⁷⁾と強引な方法であった。すなわち、西原亀三は、「当時朝鮮の詔勅に、髪を斬り俗を易へ、いはれなく会集する者は乱民である、曉諭解散せずんば宜しく砲殺すべし、といふのがありました。今の日本人には殆ど理解出来な

いやうな場面だつた」⁷⁸⁾と、朝鮮半島における断髪の意味を理解した上で、大韓帝国政府の弾圧に立ち向かう決意を示すために、断髪を提案したのである。このように、一進会が断髪という生死をかけた覚悟をした理由は、「宋秉峻等は是非やりたい、やらなければ吾々の存在が無くなる」⁷⁹⁾としているように、一進会を結成したことは、彼らの政治生命を掛けた取り組みであったと考えられる。

一進会と進歩会の統合が報道されると、進歩会の前身が国賊の東学であるがゆえに、政府の弾圧は一層強まることとなる。1904年12月27日、鐘路の事務所が封鎖された一進会は、大安門（光武皇帝が居住する慶運宮の正門）前に事務所を設けて会合を開いたが、再び兵士と警察に囲まれて会長と副会長が連行される事件が発生した⁸⁰⁾。取り調べにおいて解散を迫られた会長の尹始炳は、会員に解散を要求すれば彼らの怒りによって殺されるがゆえに、国法によって処刑された方がよほどましであるという挑発的な態度を示した⁸¹⁾。まもなく駆けつけた日本憲兵隊によって会長と副会長は解放されるが、結果的には、一進会はソウルから追放されることとなった。

第2節 独立館基址の獲得と「独立」なるスローガン

政府の弾圧によってソウル内の事務所を全て封鎖された一進会は、早速ソウルの外側にあった独立館基址に移っていく。だが、独立館基址は独立協会が解散されてから国有地に編入されていたがゆえに、尹始炳は、その所有権を獲得するために政府と交渉を行なっていく。その最初のやり取りと思われる文書の内容によると、独立保全は我が二千万同胞の両肩にかかっているとしている⁸²⁾。そこでは、独立を維持するのは国民の義務であり、独立館は二千万同胞の居場所であると主張することにより、一進会が独立館基址を所有することの妥当性を訴える内容となっている。かくて、政府と約一年間の交渉を行なった一進会は、ついに独立館基址を所有することになる⁸³⁾。

一進会は政府の弾圧から態勢を立て直すために、大規模の演説会が開催できるよう、独立館基址に国民演説台（写真3）を建設することに着手した⁸⁴⁾。1905年1月10日、独立館にて演説会が開催され、尹始炳の弟で一進会の評議員であった尹吉炳ユン・ギルピョンは、「独立館の寂寞たる7年に再びこの門を開いたがゆえに、我が国の独立基礎を固めることはこの日に在り」⁸⁵⁾と、まるで独立協会が復活したかのごとく、一進会が独立協会を継承していると

写真3. 独立館と国民演説台



出典：山口正之『慶熙史林』京城公立中学校、1940年、図版ページより引用。

するニュアンスの祝辞が述べられたのである。

しかしながら、旧独立協会のメンバーが全員一進会に加わったわけではなかった。独立協会の内部派閥を調査した朱鎮五^{ジュ・ジンオ}の研究によると、主に穏健派と急進派に分裂しており、『駐韓日本公使館記録』の一進会の名簿と比較すると、一進会に加入した旧独立協会のメンバーは必ずしも一つの派閥に偏ってはいなかった⁸⁶⁾。独立協会の幹部であった鄭喬は、同じく急進派の一員であった李建鎬^{イ・コンホ}に一進会への加入を促された。その誘いに対して鄭喬は、「我々は、本来独立協会の人間です。今日どうして外国人に頼る会合に加入することができるでしょうか⁸⁷⁾と、独立協会とは活動趣旨の異なる一進会に対して協力しない意思を明らかにした。尹始炳が直接に鄭喬に対して評議員の職を担ってほしいとの書信を送ったものの、この申し出を鄭喬は承諾しなかったのである。鄭喬が一進会を拒んだ理由として、「我々の政略と知略が外国人より十倍も優れたとしても、彼らは強くて我々は弱いです。よって、彼らに利用されるばかりで、最終的に目的を達成することはできないでしょう⁸⁸⁾とあるように、外国に依存する政治活動は、必ず制約を受けると考えたからであった。したがって、一進会が掲げる「独立」は独立協会の「自主独立」とは異なる「依存独立」の方向性を示していたとすることができるのであろう。

それでは、大韓帝国における「独立」の意味について、一進会はどのように捉えていたのか。宋秉峻は、演説会にて「十年前に日本が先覚して東洋を維持するという義侠心で日清戦争を起こしたがゆえに、我韓自主独立が第一の政略であった。この時から清国の束縛を脱したのである⁸⁹⁾と述べている。それを踏まえた上で、「外交内治を完全にするために、独立を維持させる目的で今日一進会が有するがゆえに、同盟国の恩義を確信して何十何百年をかけても、必ず目的を達成します⁹⁰⁾として、一進会の決意を訴えた。また、徐載弼や独立協会が、「自主独立」を実現していくために忠君愛国を強調していたことに対し、一進会も、四大綱領において「皇室を尊重して国家基礎を固める」と定めていた。だが、宋秉峻の本音は、「如何ニシテ李朝五百年來ノ暴虐ナル政令ノ下ヲ脱セン歟⁹¹⁾と、独立した大韓帝国が君主国家であることに対して不満を持っていたのである。すなわち、一進会にとって大韓帝国の「独立」とは、日清戦争があったからこそ大韓帝国の独立が実現できたと捉えており、忠君愛国ではなく日本政府の恩恵を信頼して大韓帝国の独立を維持していくこと、つまり「依存独立」が一進会の使命であると主張しているのである。

日露戦争の終結後、締結された乙巳条約、すなわち第二次日韓協約（1905年11月17日）によって、大韓帝国の外交権は明治政府に接收されることとなった。それは、事実上、大韓帝国が大日本帝国の保護国となることを意味する。伊藤博文が来韓したことを契機に、宋秉峻は新協定が締結される前にそれに対する国民の支持が得られるように、尹始炳に宣言書を作成して全国に配布することを依頼した⁹²⁾。その宣言書によれば、もし外交権を日本に委任すると

しても、1904年に締結された日韓議定書の内容と変わりはなく、ただ「形式の変化に過ぎない」として、懸念するほどの事案ではないと主張したのである⁹³⁾。また、宣言書の最後には、全国に広がる不安を事前に抑えるために、「独立保護と疆土維持は、大日本皇帝の詔勅を世界に公布したがゆえに、再度疑う必要はない。我が党は、一心同気して、信義として友邦と交誼し、誠意として同盟の指導に従い、その保護に依拠して国家独立を維持する。これによって、安寧幸福を永遠無窮にすると、ここで敢えて宣言する」⁹⁴⁾と述べられている。かくて、一進会は日本政府を信じて、あくまで「依存独立」を貫くという方針を明記したのである。

他方で、宣言書が配布されてから、「日本の属国となるのではないか」といううわさが全国に流布され、それによる動揺が広がるとともに、義兵の武装蜂起が拡大していった⁹⁵⁾。要するに、新協定に対する支持を得るための目的で配布した宣言書が、むしろ逆効果を招いてしまったのである。第二次日韓協約に関するこの宣言書の波紋が、一進会の幹部にどう影響されたかは確認できないが、宣言書を配布した翌月の12月22日の役員会議にて、李容九が一進会の第二代会長として選出され、尹始炳は総務員に降任された⁹⁶⁾。それから半年後、『大韓毎日申報』の「一進會分裂兆候」という記事によると、「宋秉峻に対して急進的に援助しようとする会長李容九と、従来宋秉峻の権勢利用に批判的であった尹始炳の一派」⁹⁷⁾と、一進会の幹部層において変動が生じたことを読み取ることができる。すなわち、尹始炳と李容九、そして宋秉峻の間では軋轢が生じていたのである。

かくて、尹始炳は権力獲得の目標であった政府官僚に起用されることもなく、一進会における彼の影響力は衰退していった⁹⁸⁾。一方で、宋秉峻と李容九は、それまでの「依存独立」を取り下げ、保護統治を受けている現状を改善するためには、「一大政治機関」の成立による「法律上ノ政合邦」が必要であると訴え、新たなスローガンとして「韓日合邦論」を掲げて政治活動を続ける⁹⁹⁾。だが、日韓併合に際して、朝鮮における全ての政治団体は解散することを命じられ、一進会は解散を余儀なくされたのである¹⁰⁰⁾。

第3節 三・一運動の「自由独立」と独立門

日韓併合、すなわち、1910年8月22日に「韓国併合ニ関スル条約」が調印されたことによって、大韓帝国はわずか10年余りで滅亡することになる。かくて、大韓帝国の皇室と政府の権力およびその機能は完全に失われ、その後の朝鮮半島の内政は、韓国統監府に代わって朝鮮総督府（以下、総督府）が担うこととなる。総督府は、治安と秩序の安定化を図るために、義兵運動勢力の完全なる鎮圧と集会や政治活動の禁止、そして反日世論を抑える必要があった。それゆえに、総督府は、併合以前から施行していた保安法、新聞紙法、出版法、そして憲兵警察制度を継続し、日本の刑法と刑事訴訟法とは異なる、植民地統治に対応した朝鮮刑事令を公布することによって、いわゆる「武断政治」を行なっていく¹⁰¹⁾。

1919年1月22日、光武皇帝の原因不明の急死によって様々な風説が散布されるなか、国葬が3月1日から数日に行なわれることとなり、3月1日まで、全国からおよそ20万人が弔問のために上京したとされる¹⁰²⁾。これを機に3月1日、ソウルでは、「我々はここに我が朝鮮が独立国であることと、朝鮮の人が自主民であることを宣言する」から始まる独立宣言書が発表され、「朝鮮民族」の名で日本政府と総督府、また世界に対して「自由独立」を訴えた万歳示威、すなわち、三・一運動が勃発した。三・一運動は、翌月の4月末まで、全国212カ所で1214回行なわれて、およそ110万人が示威に参加したと見られる。それは、さらに、ニューヨーク、上海、ウラジオストクを中心に海外においても拡大していった¹⁰³⁾。

「独立」を記念する独立門も三・一運動の拠点の一つとなり、集まった群衆は示威に参加した（写真4を参照）¹⁰⁴⁾。その示威では、独立門に大韓帝国の国旗であった太極旗が掲げられ、また、独立門の碑文の両方に刻まれてある太極旗（写真1）に色が塗られる事件が発生し、日本の警察はその収拾に取り組んだ¹⁰⁵⁾。写真2のスモモの花の下に交差した形の太極旗が描かれているが、模様の部分が消されていることを見ることができる。その写真からもわかるように、植民地統治下の当時の朝鮮半島では、亡国となった大韓帝国の国旗を掲揚すること、制作すること、そして所持することが禁止されていたのである¹⁰⁶⁾。その事件の警察の対応について、独立協会の幹部であった

イ・サンジェ李商在は、「貴方達は、ささやかなことと重大なことを区別できないがゆえに、他人を支配する資格などない。独立門に刻まれた太極旗にペンキを塗ったことに激怒して、消防隊を送ったことを考えて見ろ」¹⁰⁷⁾と、総督府の当局者に直接抗議した。太極旗の使用を厳格に規制する警察の対応からして、ここには独立運動の大衆化を統制および封じ込めようとする総督府の狙いが伺える。

このように三・一運動は、総督府の「武断政治」に対する人々の不満と光武皇帝の暗殺説による人々の怒りと、植民地統治から「自由独立」を達成しようとする独立運動が結びついて現れた抵抗運動であったと言える。終戦後に大韓民国が樹立され、三・一節という国家記念日として制定された三・一運動は、国民に対する愛国心と民族精神の高揚を促す歴史的シンボルとして提示されることになった。

三・一運動に参加した代表的な独立運動家である柳寛順^{ユ・グァンスン}が、終戦後になって初めて公に知られるようになったことで、彼女が監禁されて拷問によって死亡した西大門刑務所も、三・一運

写真4. 独立門の前で示威中の群衆



出典：崔仁辰『韓国写真史:1631-1945』（姜美賢ほか訳）青弓社、2015年、485ページより引用。

動の関連史蹟として注目を浴びることとなる¹⁰⁸⁾。西大門刑務所が独立門と隣接したことで、日韓併合以降の新聞記事には、「生い茂った草に覆われた独立門、花札の絵札のような監獄」¹⁰⁹⁾や、「馬関条約の二番目の条文に依存して傀儡に過ぎても独立という真似をし、それを記念するために建てた独立門が、しばらくして西大門刑務所と向き合って監禁をされた理由は、読者の皆さんが自ら知っていることでしょう」¹¹⁰⁾など、独立とは程遠い植民地統治下の朝鮮の現状を、独立門と西大門刑務所の比較から例えられることもあった。この相反した背景を持つ二つの建築物は、独立門が1979年の周辺道路工事によって北西方向の現在の位置に移動されたことによって、西大門刑務所と一体化した西大門独立公園が造成される。西大門独立公園を管理するソウル特別市は、かかる公園を造成した目的について、「祖国の独立のために抗拒して獄中で苦しんだ愛国志士の自主独立の精神を、子孫に記憶させるために」¹¹¹⁾と述べている。西大門独立公園には、徐載弼の銅像と復元された独立館の他に、三・一運動記念塔や殉国先烈追念塔などが建てられている。西大門独立公園の造成によって、かかる公園の正面入口に位置づけられた独立門は、徐載弼が掲げた当初の「自主独立」だけではなく、「自由独立」を継承する役割も担うシンボルとなったのである。

第4章 朝鮮総督府の「文化政治」と独立門の役割

終戦後、南朝鮮過渡政府の最高顧問としてアメリカから二度目の里帰りを果たした徐載弼は、50年ぶりに訪れた独立門を見て「私がアメリカで聞くには、倭敵がこの門を壊したと聞き、里帰りをして翌日西大門の外に出てみたら、この体は老いても独立門は昔の姿のまま私を迎えてくれて感無量であった」¹¹²⁾と、その感想を述べている。ここで疑問なのは、日韓併合に際して、なぜ独立門は壊されなかったのかである。植民地ましてや日本の一部となった朝鮮半島において、その独立を記念する独立門を撤去しなかったことは、当時の日本政府や総督府にとってどのような狙いがあったのであろうか。

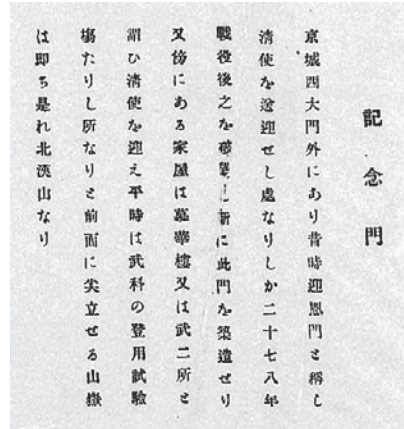
日韓併合を間近にして出版された『大日本帝国朝鮮写真帖』には、当時の韓国統監府が独立門をどのように捉えていたのかを、写真5-1と写真5-2を通じて読み取ることができる。ここで注目すべき点は、写真のタイトルとその説明が漠然とした表記になっていることである。まず、写真5-1のタイトルは、「記念門」、その訳として「Memorial Gate」（写真のスペルに少々誤字がある）が使われている。これに関して、なぜ、「独立門」、または「Independence Arch」と、正式な名称を使用しなかったのか疑問を持つ。それから、写真5-2の説明においても、独立門や独立館に関する記述はあるものの、その名称を明記しておらず、また、「記念門」ならば、何を記念するために作られたのか、そもそも誰によって作られたのかという基本的な説明さえ欠けていることが見受けられる。この写真をめぐるタイトルと説明が、意図的に作成

されたものかどうかを確認することはできないが、日韓併合が決まった段階において、韓国統監府の立場から、独立門に関する説明文の作成に関与することは、容易なことではなかったと思われる。

写真 5-1. 「記念門」と記してある独立門と独立館



写真 5-2. 写真 5-1 の説明



出典：統監府 編『大日本帝国朝鮮写真帖：日韓併合記念』小川一真出版部，1910 年より引用。

三・一運動が展開された時期は、独立門が完成して 20 年が経過した時期でもある。当時の独立門の保存状態について、ソウルに滞在していた日本人の詩人である山地白雨は、「門は今や甚しく亀裂を生じて、秋風の吹くに任せてある」¹¹³⁾と説明している。その状態とは、写真 6 のように、数カ所に亀裂が生じて、雑草が生えるなど、当時の独立門は、維持管理が全くされていない放置状態であったことがわかる。一進会の解散後、独立門は、独立館と周辺の敷地とともに宋秉峻の個人所有となった¹¹⁴⁾。独立門を囲んだ鉄条網（写真 6）は、1908 年から約 20 年間張り巡らされていたとされるが、1908 年という時期は、一進会において尹始炳の勢力が衰退して、「依存独立」から「韓日合邦論」に転換される時期と一致する¹¹⁵⁾。つまり、独立門は、尹始炳にとって、

政治活動の再開の象徴するようなものであった。だが、「韓日合邦論」を訴える宋秉峻には、もはや無意味なものであったと考えられる。一進会解散後の宋秉峻は、自営業の失敗と、故人

写真 6. 鉄条網に囲まれた独立門



独立門は朝鮮の歴史を語る上での重要なシンボルであり、その保存は国家の名誉と歴史の記憶を保持する上で極めて重要な役割を果たしている。

出典：仲摩照久 編『日本地理風俗大系』第 16 巻，新光社，1930 年，86 ページより引用。

である李容九の家族との金銭トラブルが間接的な要因となって、1925年1月30日に脳充血で死亡した¹¹⁶⁾。

このような独立門の放置状態に関して『東亜日報』の「社説」には、「直接管理者はいなくても、朝鮮の人にとっては保管あるいは愛護するほどの名物である」とした上で、ソウルの市民に対して独立門の保存を訴える記事が掲載された¹¹⁷⁾。また、独立門が撤去されるうわさが広まり、しばらく撤去することはないという総督府のコメントが引用されるほど、注目を集めることになったのである¹¹⁸⁾。独立門を所有していた宋秉峻の死亡と直接的な関連があったかは確認できないが、彼の死亡から独立門を修復しようとする動きが現れ始める。写真5-1と写真6を比較してわかるように、ソウルの人口増加による住宅難を解決するために、独立館基址には簡易住宅が建てられた¹¹⁹⁾。1928年の夏の雨季には、独立門が崩壊すると予測した独立門を管轄する西大門署長は、「住民と通行人の生命を脅かすことになったがゆえに、それを速やかに修繕して目前の危険を防止」することを理由に、京畿道警察部長に上申した¹²⁰⁾。それから3カ月後、独立門の修復案が京城府にて決定し、復元工事（写真7）が始まったのである¹²¹⁾。独立門の復元と周辺地域の発展に伴って、1935年には独立門の周りを路面電車が走る風景に一変したのである（写真8を参照）¹²²⁾。

写真7. 修理中の独立門

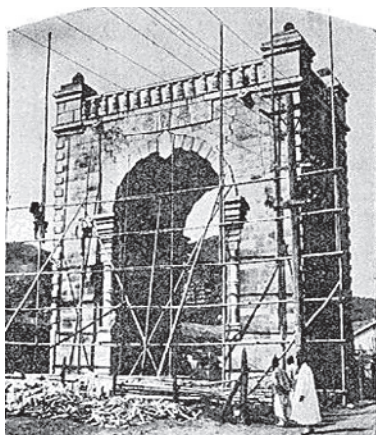
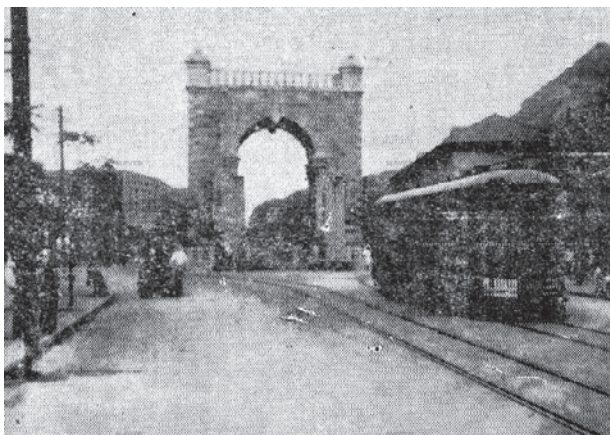


写真8. 復元された独立門とその周辺



出典：『東亜日報』，1928年10月20日， 出典：『東亜日報』，1935年10月2日，2面より引用。
2面より引用。

上記の調査から明らかになったように、日韓併合以降、数か所の亀裂によって崩壊の危険性があった独立門は、総督府の管理のもとで復元された。三・一運動を契機に「自由独立」の象徴にもなった独立門を、また、それを保存しようとする世論を反映したかのように、「他者」の立場にある総督府がその修復に取り組んだのである。独立門の修復に取り組んだ理由は、崩

壊によって近隣住民や通行人が事故に巻き込まれることを防止するためであったが、そのような理由であれば撤去する方法も一つの選択肢であったのであろう。なぜ、総督府は、独立門を復元すると決めたのであろう¹²³⁾。この疑問に関して、総督府が行っていた古蹟調査事業と、それに関する法令の朝鮮宝物古跡名勝天然記念物保存令（以下、保存令）に注目する。1931年6月、「朝鮮古蹟名所天然保存令」と「宝物保存令」が施行されることとなり、総督府の学務局の審議によって、独立門が京城府の古蹟として選ばれたのである¹²⁴⁾。

京城帝国大学の教授で古蹟調査事業にも携わっていた藤田亮策は、国家が法令で古蹟を保護する理由について、「単に歴史の参考になるとか、学問の上の重要な資料であるというばかりでなく、第一に郷土愛護の国民精神を盛にするといふことにあって、延いては物質文化の影響に傾き過ぎて、余りにも利害関係と衣食のことにのみ執着し易い今日の私達の生活に、も少し、うるほひのある、精神的文化の光をあててやりたいといふことが根本問題となつて居るのであります」¹²⁵⁾と述べている。ここで「郷土」という言葉に注目したい。古蹟調査事業を管轄する学務局の局長の渡邊豊日子は、保存令を制定した目的について、「郷土の記念として其の特徴を表はし（中略）郷土愛着の念を喚起し（後略）」¹²⁶⁾と、藤田亮策と同じく「郷土」という言葉を使っている。藤田亮策は、この言葉の意味について、「土に親しむことは即ち吾が郷土を愛する心であり、郷土を愛するの心は即ち国家を愛するの精神であります」と説明し、さらに最後の記述には、「少くとも是等の古蹟なり名勝の存在と其の保存とが、郷土の誇であり国家の宝であるとの知識を未来の国民に対して深く植付けたいものと考えます」と、古蹟の保護に対する彼の未来像を語っていた¹²⁷⁾。このような藤田亮策の言説は、「国家」と「郷土」の関係、すなわち、日本とその一部である朝鮮を意味すると言えよう。また、古蹟を保存することによって、郷土への誇りと愛国心が高揚されるならば、それは、朝鮮の人々を日本人として愛国精神を植え付けようとする同化政策であったと考えられる。

この同化政策を表わす言説として、文化人類学者の鳥居龍蔵は、三・一運動の勃発後「日鮮人は『同源』なり」というエッセイを発表する¹²⁸⁾。そこで、「朝鮮人は我が内地人と異人種でない、同一群に包含せらるべき同民族であります」と主張した彼は、「同一民族であるから、互いに合併統一せらるるのは正しきこと」と、日韓併合の正当性を訴えた¹²⁹⁾。さらに彼は、「日鮮人は誠に同一民族であって、我ら遠つ御祖は、古い昔は一所におったのであります。（中略）私は今後総督府の施政方針も、また世間の政治家その他の人々も、この心を以て朝鮮のことに関係してもらいたい」¹³⁰⁾と、総督府の「武断政治」の改善を求めたのである。このエッセイが発表された1920年は、第3代朝鮮総督であった斎藤実が就任した年であり、彼の就任に際して、それまでの総督府の「武断政治」が「文化政治」へと転換されていく時期でもある。「文化政治」とは、三・一運動に際して、既存の「武断政治」では朝鮮半島における反日世論を抑えることが限界に達し、融和政策に転じた「一視同仁」に基づく内地延長主義をスローガンと

した統治方法である。これは、三・一運動による独立運動の余波を抑えるとともに、植民地統治において朝鮮の人々からの支持および協力を得ようとする趣旨のものであった¹³¹⁾。その具体的な政策の変化として、それまで「武断政治」を象徴していた憲兵警察制度を廃止し、言論・出版・集会が部分的に許容されるほか、一方では、植民地史観に基づく「朝鮮史」の編纂や教育改革などの同化政策が展開されていったのである¹³²⁾。したがって、保存令の制定は、「文化政治」における同化政策の一環であったとすることができる。

このように、保存令が同化政策と関連があるならば、「独立」を記念して政治的性格を有する独立門を、どのように日韓併合や同化政策と結び付けることができるのであろうか。次に、写真5-2の説明は漠然とした記述となっていたが、その後の植民地統治下における独立門の説明の変化に注目してみたい。写真6をみると、「日清戦役の後朝鮮は支那との藩属関係をたち独立国たるを宣揚した記念門である。今は甚しく亀裂を生じて淋しく風雨にさらされてゐる」¹³³⁾という記述がある。ここには、独立門が建てられた目的は説明されているものの、誰が建てたのかという詳細までは記述されていない。もちろん、この説明は、徐載弼と独立協会が独立門を建てた目的、すなわち「自主独立」とは関係のない説明になっている。その他にも植民地統治下の独立門に関する記述は、「其後明治二十八年日清戦役後全く支那との藩属関係を絶ち、独立国に昇陞したるを以て、忽ち慕華館を改めて独立館と称し、迎恩門を改めて独立門を立て（後略）」¹³⁴⁾や、「明治二十七八年戦役の結果朝鮮は完全なる独立国となつて全く支那の羈絆を脱した紀念のため建てたもので（後略）」¹³⁵⁾など、写真6の説明と類似した言説が使われていた。要するに、特定の「対象」による「従属関係からの独立」という側面を拡大して強調することにより、独立門は日清戦争を起こした日本の正当性を担保し、その義侠心を賛美するシンボルとしての性格を帯びることになった。

それでは、日清戦争によって朝鮮が清国からの完全なる独立国となったと言えるのであれば、当時の日本政府は、後の日韓併合について、どのようにその独立を護持したと主張することが可能になったのであろうか。それは、上記の鳥居龍蔵の同化言説からもわかるように、「併合は侵略ではなく、古代の状態に『復古』したのだという論調」¹³⁶⁾、すなわち日韓併合の正当性を表わした日鮮同祖論から考えることができる。鳥居龍蔵は、三・一運動に影響を与えたとされる「民族自決」に対しても、「同一の民族が、分離して別に独立するという理由がどこにありますか（中略）この日鮮人合併統一のことは、国際上の問題としては一点の疑うところはありません」¹³⁷⁾と、真っ向からの批判を展開した。つまり、日鮮同祖論を用いることによって、朝鮮は清国から独立を果たして日本へと「復古」したという正当な理由を成立させることができたのである。したがって、「文化政治」に際して撤去されることを免れ、総督府の管理のもとで復元された独立門は、それまでの「自主独立」や「依存独立」、そして「自由独立」とも異なる、新たなシンボルとして生まれ変わったとすることができる。朝鮮半島における日本の

植民地統治を正当化するとともに、「復古独立」を記念するシンボルとしての役割を果たすために、崩壊寸前であった独立門は復元されたと考えることができるのである。

おわりに

ここまで、朝鮮半島における「独立」の意味を考察するために現存する独立門に着目し、政治的情勢の変化に照らしてそこに込められている「独立」がどのように変わっていったのかというシンボルの変遷過程を考察してきた。本稿では、独立門の全体像を通じて、次のように四つ意味を持つ「独立」が存在していたことを明らかにすることができた。

第1に、徐載弼と独立協会がスローガンとして掲げていた「自主独立」である。まず独立門が、いつ、誰によって、何のために建てられたのかについて明らかにしておく必要がある。独立門が建てられた背景として注目すべきところは、日清戦争という外的要因よりも、それを踏まえた上で、俄館播遷の成功によって当時の親日政権が倒されたという内的要因である。なぜなら、独立門を建てたのは朝鮮王朝や親日政権ではなく、徐載弼と俄館播遷を企図した貞洞派勢力、すなわち独立協会によるものであったからである。徐載弼と独立協会は、他国に依存せずに自国の力で独立を実現していくという「自主独立」をスローガンとして掲げ、啓蒙活動を展開していった。その活動の一環として忠君愛国も強調していたが、その理由は、独立国となった国王が他国の首脳と対等な地位であることを明確にするためにも、国王に対する国民の忠誠心を高揚する必要があったからである。かくて、徐載弼と独立協会は、「自主独立」を視覚的に表わす記念物をつくるために、また、「独立」という言葉を朝鮮の人々の心に深い印象を与えるために、独立門を建設したのである。

第2に、日本政府の支援のもとで政治活動を展開した一進会の「依存独立」である。俄館播遷によって政権交代を果たした守旧勢力は、ロシアの力を借りて「自主独立」を強化する国づくりを目指して、国王を皇帝に昇格させた大韓帝国の成立を宣言した。独立協会としては、ロシアが友好国であっても内政に関与することを警戒し、万民共同会という大衆集会を開いて政府の政策転換を訴えた。その結果、政府は独立協会の要求を受け入れることとなった。独立協会は、その勢いで立憲君主制の導入を目指す議会設立運動を展開していったが、専制君主制を維持しようとする政府との間で妥協することができず、独立協会は解散を余儀なくされた。独立協会の幹部であり、議会設立運動による参政権獲得に失敗した尹始炳は、政治活動の再開を企てるものの政府の弾圧から逃れることができなかった。それゆえに日本政府の支援が必要であったが、当時の駐韓日本公使の林権助は彼の要求を受け入れなかった。その直後に勃発した日露戦争を契機に、尹始炳は宋秉畯の協力を得て一進会を結成することとなり、一進会は韓国駐劄軍の支援のもとで政府の弾圧を逃れることができたのである。一進会の会長となった尹始

炳は、独立館基址を本拠地として独立協会が復活したかのごとく「独立」なるスローガンを掲げるが、それは日本政府の恩恵を信頼して独立を維持していこうとする「依存独立」の方向性を示したものであった。日露戦争の終結後、大韓帝国の外交権を日本政府に接收する第二次日韓協約が締結されても、尹始炳はあくまで「依存独立」を貫くという方針を表明した。一進会の幹部のなかでは、一貫した「依存独立」を容認できない意見が多数を占めており、尹始炳は会長に再選されることなく、彼の一进会における影響力は衰退していった。

第3に、植民地統治からの解放を訴えた三・一運動の「自由独立」である。尹始炳が会長を降任した後、一进会は「依存独立」を取り下げて新たなスローガンとして「韓日合邦論」を掲げた。それによって、不要となった独立門には鉄条網が張り巡らされた。だが、一进会は日韓併合によって解散を余儀なくされ、独立館と独立門を含む独立館基址は宋秉喆の個人所有となったのである。その後の1919年3月1日には、総督府の「武断政治」に対する人々の不満と、光武皇帝の原因不明の急死による人々の怒り、そして植民地統治から「自由独立」を達成しようとする独立運動が結び付いた三・一運動が勃発した。「独立」を記念する独立門も三・一運動の拠点の一つとなり、集まった群衆は所持禁止となっていた大韓帝国国旗の太極旗を独立門に掲げるなどの示威運動を展開した。

三・一運動は、終戦後になって三・一節という大韓民国の国家記念日となり、国民に対する愛国心と民族精神の高揚を促す歴史的シンボルとして提示されることになった。かくて独立門は、三・一運動を記念する西大門独立公園の一部となり、徐載弼が掲げた当初の「自主独立」だけではなく、「自由独立」を継承する役割も担うシンボルとなったのである。

第4に、日韓併合および植民地統治の正当化を可能にした「復古独立」である。日韓併合に際して、なぜ、当時の日本政府と総督府は独立門を撤去しなかったのであろうか。そこにはどのような狙いがあったのであろうか。三・一運動が展開された時期は、独立門が完成して20年が経った時期であり、独立門は数カ所に亀裂が生じて雑草が生えるなど放置状態に置かれていた。独立門が撤去されるうわさが広まるなか、近隣住民と通行人の生命を脅かす危険性を事前に防止するという理由で、独立門は総督府の管理のもとで復元されたのである。一方で、独立門の復元は総督府が行っていた古蹟調査事業と関連があった。ここでは、三・一運動を契機に、総督府はそれまでの「武断政治」から融和政策である「文化政治」へとその統治方法を転換させていた点が重要である。独立門は古蹟として選ばれたが、古蹟調査事業の目的は、「単に歴史の参考になるとか、学問の上の重要な資料であるというばかりでなく」、朝鮮の人々を日本人として愛国精神を植え付けようとした同化政策の一環であったのである。その同化政策を表す言説として、「併合は侵略ではなく、古代の状態に『復古』したのだという論調」、すなわち日韓併合の正当性を表わした日鮮同祖論がある。つまり、日鮮同祖論を用いることによって、朝鮮は清国から独立を果たして日本へと「復古」したという正当な理由を成立させること

ができたのである。したがって、朝鮮半島における日本の植民地統治を正当化するとともに、「復古独立」を記念するシンボルとしての役割を果たすために、崩壊寸前であった独立門は復元されたと考えることができるのである。

かくて、独立門というシンボルには、政治情勢が変化していくなかで、独立門に対して政治情勢に適合した形で様々な「独立」の意味が付与されてきたことが明らかになった。同じ「独立」という言葉であっても、それを捉える政治的立場やその状況によって、異なる解釈や意味づけがなされてきたのである。独立門に付与された意味の変遷過程を考察した本研究を通して、「独立」の意味の変化が、近代朝鮮におけるネーションなるものの形成にどのような影響を与えていったのかという課題が新たに浮かび上がってきた。この課題については、改めて稿を起すこととしたい。

注

- 1) より詳しくは、拙稿「近代朝鮮におけるナショナリズムと『シンボル』の機能に関する一考察」（『立命館国際地域研究』第36号、2012年、191-192ページ）を参照。
- 2) より詳しくは、Anthony D. Smith, *Ethno-symbolism and Nationalism: A Cultural Approach*, London, 2009, Chapter 2. Montserrat Guibernau and John Hutchinson (eds.), *History and National Destiny: Ethnosymbolism and its Critics*, Oxford, 2004, Introduction and Chapter 1. を参照。
- 3) 慎鋪廈「独立門・独立館・独立公園の建立と変遷」（『郷土ソウル』第59号、1999年、77-105ページ）。キム・セミン「迎恩門、慕華館の建立と独立門、独立館への変遷」（『郷土ソウル』第82号、2012年、141-178ページ）。
- 4) 「独立慶祝日に定めることを命じる」（『朝鮮王朝実録』高宗33巻、1895年5月10日、1番目の記事）。
- 5) 「日清講和條約締結通報」（『駐韓日本公使館記録』、1895年4月21日）。
- 6) 参謀本部 編『明治二十七八年日清戦史』第8巻（国立国会図書館デジタルコレクション、90コマ目）。
- 7) 1890年3月、当時の内閣総理大臣であった山縣有朋は「外交戦略論」を発表するが、その内容を見れば「国家独立自衛ノ道ニツアリーニ曰ク主権線ヲ守禦シ他人ノ侵害ヲ容レスニ曰ク利益線ヲ防護シ自己ノ形勝ヲ失ハス」と、さらに「我邦利益線ノ焦点ハ実ニ朝鮮ニアリ」と述べ、今後日本の対朝鮮政策に関する行動様式を提示した。かくて、日本は「独立」を守護するために朝鮮を「利益線」として確保し、朝鮮は「独立」を実現するために日本を「他者」として抵抗する、両国をめぐる「歴史」が始まろうとするのである。大山梓 編『山縣有朋意見書』原書房、1966年、196-201ページ。加藤陽子『戦争の日本近現代史』講談社現代新書、2002年、82-97ページ。
- 8) 「三国干渉の覚書原文通報」、「三国干渉に対処する方案の一つを朝鮮駐在の日本公使が建議」（『駐韓日本公使館記録』、1895年4月25日）。
- 9) キム・ジョンホンによれば、「ロシアの対朝鮮政策は、『朝鮮の独立維持』と一貫したが、その意味は時期によって異なっていた。つまり、日清戦争以前の朝鮮の独立は、ロシア極東の不足した経済力と軍勢力を考慮して朝鮮が清国の属国化するのを防ぐ意味であり、日清戦争以降の朝鮮の独立は、朝鮮における日本の勢力を牽制することにより、将来ロシアの勢力圏に含まれる朝鮮半島が日本に掌握さ

- れることを防ぐという意味であった」としている。キム・ジョンホン「清日戦争以降在韓ロシア外交官の活動に関する考察」(『スラブ学報』第24巻2号, 2009年, 273ページ)。
- 10) 李玖源「大韓帝国の成立過程と列強との関係」(『韓國史研究』第64号, 1989年, 117-145ページ)。李修京, 朴仁植「朝鮮王妃殺害事件の再考」(『東京学芸大学紀要人文社会科学系I』第58集, 2007年, 93-105ページ)。
 - 11) 「自主独立」とは, 「単に特定の国からの『独立』を記念するものではなく, 周辺国から自立して国王が他国の首脳と対等な立場となったがゆえに, これを契機にして, 自力で『独立』を達成していく」ものとして捉えていたと考えられる。注2にある拙稿, 194ページを参照。
 - 12) 徐載弼は, 朝鮮の人々の啓蒙に力を注ぎたいことを強調していた。それは, 甲申政変が「三日天下」で失敗した原因の一つとして大衆の支持がなかったこと, また, 約10年間のアメリカ滞在で「自由民主主義」を身をもって体験したことで, 変革を成し遂げるためにも啓蒙活動の必要性を実感したのであろう。
 - 13) 金道泰『徐載弼博士自叙伝』乙酉文庫, 1972年, 238ページ。
 - 14) 同上, 247-248ページ。
 - 15) 「論説」(『独立新聞』, 1896年12月31日)。
 - 16) 「論説」(『独立新聞』, 1896年7月4日)。独立門の建設をめぐる徐載弼と独立協会の活動については, 注2にある拙稿の194-198ページを参照してほしい。
 - 17) 「論説 独立館演会」(『独立新聞』, 1896年11月24日)。
 - 18) モク・スヒョン「韓国近代転換期における国家視覚象徴物」(ソウル大学校大学院考古美術史学科 博士学位論文, 188-194ページ)。
 - 19) 「論説」(『独立新聞』, 1896年9月8日)。
 - 20) 「論説」(『独立新聞』, 1897年8月21日)。
 - 21) 同上。
 - 22) その他にも, 『独立新聞』の1896年9月8日や同年の9月12日の「論説」など, 愛君について説く記事は, 主に官僚に向けられていたことが読み取れる。
 - 23) 徐載弼のアメリカへの送還をめぐる背景については, 注2にある拙稿の196-198ページを参照してほしい。
 - 24) 「雑報」(『独立新聞』, 1898年5月19日)。
 - 25) 独立館基址とは, 大韓帝国政府が一進会に対して所有権を認めた独立門と独立館を含むその一帯のことである。
 - 26) 「論説」(『独立新聞』, 1897年10月12日)。
 - 27) 金承台『独立協会を創設した開化・改革の先駆者徐載弼』歴史空間, 2011年, 92ページ。
 - 28) 「論説」(『独立新聞』, 1897年10月23日, 10月28日, 10月30日, 11月11日, 11月16日, 11月18日, 12月30日)。
 - 29) 「論説」(『独立新聞』, 1897年11月16日, 11月18日)。金道泰, 前掲書, 238ページ。
 - 30) 韓興壽「独立協会の政治集団化課程」(『社会科学論集』Vol.3, 1970年, 32-34ページ)。
 - 31) 1898年7月に謀反を企てたとして, 日本に亡命することとなる。イ・ファンジク『独立協会, 討論共和国を夢見る』プロネシス, 2010年, 139ページ。愼鏞廈『新版 独立協会研究(上)』一潮閣, 2006年, 388ページ。
 - 32) この上疏の内容については, 注2にある拙稿の197ページを参照してほしい。

- 33) *The Independent*, March 12th, 1898, 'Local Items'.
- 34) 「排露熱勃興并ニ露國士官顧問官等撤退一件」（『駐韓日本公使館記録』, 1898年3月31日）。
- 35) 金道泰, 前掲書, 247-251 ページ。
- 36) 「雑報」（『独立新聞』, 1898年3月29日）。
- 37) 議会設立運動の詳細については, 注2にある拙稿の198-200ページを参照してほしい。
- 38) 議会設立運動の失敗に対して徐載弼は, 自分の業績はもはや独立門しか残っていないと語っている。
金道泰, 前掲書, 256 ページ。
- 39) 尹始炳がどのような人物であったのかについて, その背景を整理おきたい。日清戦争の終結が近付いていた頃, 第二軍司令官の大山巖は, 清国軍を撃滅する日本軍の威力を朝鮮官僚に見せ付けるために, 朝鮮の現職官僚と元官僚, そして通訳を含めた10数名を戦勝慰問使として戦場に派遣した。忠清(チュンチョン)道で兵使(兵馬節度使: 地方軍を指揮する武官)を勤めた経験のある尹始炳は, この戦勝慰問使の一員として日清戦争の現場を目撃したとされる。また, 黄玟(ファン・ヒョン)によると, 尹始炳が弟の尹吉炳(ユン・ギルビョン)と1894年に東学に入ったと記している。確かに, 尹始炳が東学の本拠地であった忠清道にて兵使を勤めていたがゆえに, 東学との何等かの関係があった可能性は考えられるが, それが定かであるかどうかは確認できない。少なくとも彼の出身が武官であったことは注目すべき点であると言える。彼の独立協会における活動については, 注2にある拙稿の198-200ページを参照してほしい。「日清戦争戦勝慰問使派遣の件」（『駐韓日本公使館記録』, 1895年3月10日）。黄玟『訳注 梅泉野録・下』文学と知性社, 2011年, 180-181 ページ。
- 40) 「爆裂弾投入に関する件」（『駐韓日本公使館記録』, 1899年6月15日）。「爆裂弾一件」（『駐韓日本公使館記録』, 1899年6月30日）。「崔廷徳との同行者通報の件」（『駐韓日本公使館記録』, 1899年7月8日）。「權在衡が民会の再建を企んでいる高永根, 崔廷徳を逮捕することを上奏した」（『朝鮮王朝実録』高宗40巻, 1900年9月19日, 2番目の記事）。
- 41) 文一熊「大韓帝国成立期における在日本亡命者集団の活動(1895-1900)」（『歴史と現実』第81号, 2011年, 329 ページ）。
- 42) 「侍衛隊の陰謀に関する件」（『駐韓日本公使館記録』, 1899年11月1日）。
- 43) 「侍衛隊の陰謀に関する件」（『駐韓日本公使館記録』, 1899年11月2日）。「朴泳孝の陰謀加担説」（『駐韓日本公使館記録』, 1899年11月4日）。
- 44) 「崔廷徳・尹始・李奎東の大阪滞在報告」（国史編纂委員会 編『要視察韓国人挙動2』国史編纂委員会, 2001年, 1899年11月25日）。「朴泳孝・尹始炳・韓錫璐の神戸往來報告」（『要視察韓国人挙動2』, 1900年5月4日）。
- 45) 「安駟壽の歸國許可報告」（『要視察韓国人挙動2』, 1899年11月9日）。
- 46) 「安駟壽の帰国に関する件」（『駐韓日本公使館記録』, 1900年2月3日）。「一昨年逃亡した罪人の安駟壽が自首して平理院で処理することを命じる」（『朝鮮王朝実録』高宗40巻, 1900年2月10日, 3番目の記事）。
- 47) 安駟壽は, 王妃殺害事件当時は軍部大臣を務めていた。「中枢院議長の申箕善が逆敵安駟壽と權滢鎮を速やかに処罰することを申し出る」（『朝鮮王朝実録』高宗40巻, 1900年5月26日, 2番目の記事）。文一熊, 前掲論文, 328-331 ページ。「朴泳孝・尹始炳・韓錫璐の神戸往來報告」（『要視察韓国人挙動2』, 1900年5月4日）。「李裕寅は自分の私的感情で安駟壽などを絞刑にしたことを申し上げる」（『朝鮮王朝実録』高宗40巻, 1900年5月28日, 2番目の記事）。「安駟壽事件の顛末」（『駐韓日本公使館記録』, 1900年6月15日）。

- 48) 文一熊, 前掲論文, 331 ページ。
- 49) 大韓帝国国制では, 第 1 条に大韓帝国は自主独立国であること, 第 2 条に政治は専制政治であること, 第 3 条に皇帝は権力を保持した自立政体であること, 第 4 条に臣民が君権を侵害する行為を行なう場合は「道理を失った者」と見なすことと記されてある。『高宗時代史』第 4 集, 1899 年 8 月 17 日。
- 50) 林雄介「一進会の前半期に関する基礎的研究—一九〇六年八月まで—」『朝鮮社会の史的展開と東アジア』山川出版社, 1997 年, 495-496 ページ。京城憲兵分隊編纂『一進会略史』(マイクロ・フィルム, 学習院大学東洋文化研究所 所蔵), 1-3 ページ。
- 51) 黄玟, 前掲書, 180-181 ページ。
- 52) 西原は「保全会」と記したが, 保全会という政治団体は存在せず, 文脈の時期と黄玟の証言からして「保安会」を指すのではないかと考える。永島広紀 編『植民地帝国人物叢書 33 (朝鮮偏 14)』ゆまに書房, 2010 年, 443 ページ。
- 53) 「韓国内ノ未耕地経営ニ關スル件」(『駐韓日本公使館記録』, 1904 年 4 月 8 日)。
- 54) 「雑報 醉狂激言」, 「雑報 保安所函請」(『皇城新聞』, 1904 年 7 月 16 日)。「雑報 輔安會狀況」(『皇城新聞』, 1904 年 7 月 22 日)。
- 55) 慎鍾廈「旧韓末輔安会の創立と民族運動」(『社会と歴史』第 44 卷, 1994 年, 77-78 ページ)。
- 56) 同上, 77 ページ。
- 57) 鄭喬『大韓季年史下』宇鍾社, 1957 年, 135-136 ページ。
- 58) 「雑報 日捉韓紳」(『皇城新聞』, 1904 年 7 月 18 日)。「雑報 長副請帖」(『皇城新聞』, 1904 年 7 月 19 日)。「雑報 長副許叅」(『皇城新聞』, 1904 年 7 月 21 日)。「雑報 輔安會狀況」(『皇城新聞』, 1904 年 7 月 22 日)。「雑報 會長説明」(『皇城新聞』, 1904 年 7 月 23 日)。「雑報 保安會續」(『皇城新聞』, 1904 年 8 月 27 日)。
- 59) 黄玟によると, 「尹始炳等が会の名を変えて維新会と決めたが, しばらくして再び一進会と変えた」と述べているが, 「会の名を変えて維新会と決めた」ということは, それ以前に尹始炳等は何かの民会に属していたことを意味するわけで, 『梅泉野録』の文脈からすれば, その民会とは保安会を指すこととなる。黄玟, 前掲書, 187-189 ページ。
- 60) 「雑報 神鞭渡韓」(『皇城新聞』, 1904 年 5 月 16 日)。「雑報 神鞭帰国」(『皇城新聞』, 1904 年 8 月 8 日)。橋本五雄 編『謝海言行録: 伝記・神鞭知常』大空社, 1988 年, 278-285 ページ。
- 61) 橋本五雄 編, 前掲書, 279 ページ。
- 62) 同上, 279 ページ。
- 63) 「韓国政界ノ狀況」(『駐韓日本公使館記録』, 1904 年 11 月 26 日)。「宋秉峻外数十人が民会を發起して」(『高宗時代史』第 6 集, 1904 年 8 月 18 日)。「光武 8 年 8 月 18 日」(『元韓国一進会歴史 卷之一』, 5 ページ)。
- 64) 鄭喬, 前掲書, 135-136 ページ。「光武 8 年 8 月 20 日」(『元韓国一進会歴史 卷之一』, 5-6 ページ)。
- 65) 同上。ここには「政府ハ警官及兵士ヲ派シテ会場ニ出入スル人民ヲ阻止スル等頗ル抑圧ヲ加ヘシガ日本憲兵四名ノ出張保護ニ依リ無事ナルヲ得タリ」とする記載がある。京城憲兵分隊編纂, 前掲書, 5 ページ。
- 66) 「民会を解散するよう命令を下す」(『朝鮮王朝実録』高宗 44 卷, 1904 年 9 月 24 日)。
- 67) 「一進會臨時事務所を鐘路白木廬都家へ」(『高宗時代史』第 6 集, 1904 年 8 月 22 日)。「雑報 一進会開」(『皇城新聞』, 1904 年 8 月 22 日)。
- 68) 一進会会長の尹始炳の名前で出されたこの趣旨書の日付は, 「1904 年 7 月 20 日」と記してあるが, 維

新会から一進会へと団体名の変更があったことと、配布された日付を『元韓国一進会歴史』から確認すると、「1904年8月20日」が正しいと考える。「一進会と称する東学徒の順川集会状況報告の件別紙1. 一進会創立趣旨書」（『駐韓日本公使館記録』, 1904年9月17日）。「光武8年8月20日」（『元韓国一進会歴史 卷之一』, 5-6 ページ）。

- 69) 「進歩會員ト稱スル韓民集合ノ件ニ關スル具報」（『駐韓日本公使館記録』, 1904年10月15日）。
- 70) 「光武8年12月2日」（『元韓国一進会歴史 卷之一』, 43-44 ページ）。
- 71) 「光武8年12月6日」（『元韓国一進会歴史 卷之一』, 47-48 ページ）。「雜報 一進上函」（『皇城新聞』, 1904年12月6日）。
- 72) 一進会の断髪は、統合される前の進歩会にて積極的に行なわれており、会員の殺害事件は、以前から多発していた。それについて、尹始炳は政府に強く抗議したのである。「雜報 一進公函」（『皇城新聞』, 1904年10月24日）。
- 73) 「論説 一進問答」（『皇城新聞』, 1904年11月26日）。「光武8年10月25日」（『元韓国一進会歴史 卷之一』, 19-20 ページ）。
- 74) 拙稿「近代朝鮮におけるネイション形成の政治的条件に関する一考察」（『立命館国際研究』第24巻2号, 2011年, 199-218 ページ）を参照。
- 75) 「論説」（『独立新聞』, 1896年5月26日）。
- 76) 永島広紀 編, 前掲書, 442-444 ページ。
- 77) 同上, 443 ページ。
- 78) 同上, 444 ページ。
- 79) 同上, 443 ページ。
- 80) 鄭喬, 前掲書, 143-146 ページ。「光武8年12月27日」（『元韓国一進会歴史 卷之一』, 72-74 ページ）。
- 81) 「雜報 一進会始末」（『大韓毎日申報（国文版）』, 1905年1月2日）。
- 82) 『各府郡來牒』, ソウル大学校奎章閣韓国学研究院〔<http://kyujanggak.snu.ac.kr>〕（最終検索日：2014年9月5日）。
- 83) 一進会の独立門基址の獲得に関する政府との具体的なやり取りについては、キム・ジョンジュン『一進会の文明化論と親日活动』シング文化社, 313-316 ページを参照。
- 84) 「光武8年12月28日」（『元韓国一進会歴史 卷之一』, 72 ページ）。
- 85) 「雜報 一進開会」（『皇城新聞』, 1905年1月10日）。
- 86) 朱鎮五「1898年独立協会運動の主導勢力と支持基盤」（『歴史と現実』第15巻, 1995年, 178-200 ページ）。「一進会現況に関する調査報告；付属書1」（『駐韓日本公使館記録』, 1904年11月22日）。
- 87) 鄭喬, 前掲書, 148-149 ページ。
- 88) 同上。
- 89) 「雜報 韓日関係演説」（『皇城新聞』, 1905年5月8日）。
- 90) 「雜報 韓日関係演説〈前号続〉」（『皇城新聞』, 1905年5月9日）。
- 91) 「一進會首領宋秉峻の信書寫本送付の件」（『駐韓日本公使館記録』, 1905年1月10日）。
- 92) 「韓国の現時局問題に対する所感を全国に呼訴した宣言書 送付 件」（『駐韓日本公使館記録』, 1905年11月6日）。
- 93) 同上。
- 94) 同上。
- 95) 鄭喬, 前掲書, 166-167 ページ。

- 96) 「光武 9 年 12 月 22 日 -26 日」(『元韓国一進会歴史 卷之二』, 114-115 ページ)。
- 97) 「雑報 一進會分裂兆候」(『大韓毎日申報〈国漢文版〉』, 1906 年 9 月 19 日)。「一進会の内部に分裂の兆候が見られる」(『高宗時代史』第 6 集, 1906 年 9 月 19 日)。
- 98) 鄭喬, 前掲書, 169 ページ。
- 99) 「日韓合邦問題に関する件 - 別紙四 声明書」『統監府文書』, 1909 年 12 月 4 日。
- 100) ソ・ヨンヒ「『国民新報』を通して見た一進会の合邦論と合邦政局の動向」(『韓国歴史研究会』No.69, 2008 年, 19-45 ページ)。
- 101) 趙景達『植民地朝鮮と日本』岩波新書(新赤版)1463, 2013 年, 2-11 ページ。
- 102) 同上, 37-38 ページ。
- 103) 同上, 41-48 ページ。
- 104) 「騒擾事件の後報」(『毎日申報』, 1919 年 3 月 21 日)。「京城付近又復騒擾」(『毎日申報』, 1919 年 3 月 28 日)。
- 105) 「仁旺山は昔のままだが, 勇姿に惨痕処々」(『東亜日報』, 1925 年 9 月 16 日)。「一つになった独立万歳(上)」(『東亜日報』, 1969 年 2 月 28 日)。
- 106) 同上。
- 107) 「一つになった独立万歳」(『東亜日報』, 1969 年 2 月 28 日)。
- 108) 「殉国の処女」(『京郷新聞』, 1947 年 2 月 28 日)。ジョン・サンウ「三・一運動の表象'柳寛順'の発掘」(『歴史と現実』74, 2009 年, 235-263 ページ)。
- 109) 「空中に展開された感傷劇」(『東亜日報』, 1927 年 12 月 22 日)。
- 110) 「仁旺山は昔のままだが, 勇姿に惨痕処々」(『東亜日報』, 1925 年 9 月 16 日)。
- 111) 『公園紹介』, 西大門独立公園 [http://parks.seoul.go.kr/template/common/park_info/park_intro.jsp?park_id=independence] (最終検索日: 2016 年 4 月 2 日)。
- 112) 「独立門建立の主人公徐博士を迎えて 16 日記念大会挙行」(『東亜日報』, 1947 年 11 月 9 日)。
- 113) 山地白雨『悲しき國: 山地白雨遺稿』(鮮満叢書: 第 4 卷) 自由討究社, 1922 年, 29-30 ページ。
- 114) 「京城の名勝と古蹟」(『開闢』, 1924 年 6 月 1 日)。「京城がもつ名所と古蹟」(『別乾坤』第 29 号, 1929 年 9 月 27 日)。
- 115) 「独立門修繕」(『東亜日報』, 1928 年 10 月 20 日)。
- 116) 「宋秉峻が死亡」(『東亜日報』, 1925 年 2 月 1 日)。
- 117) 「橋北洞独立門」(『東亜日報』, 1924 年 5 月 5 日)。「独立門を見て」(『東亜日報』, 1924 年 9 月 3 日)。
- 118) 「仁旺山は昔のままだが, 勇姿に惨痕処々」(『東亜日報』, 1925 年 9 月 16 日)。
- 119) 「極貧者の安堵處」(『東亜日報』, 1922 年 6 月 17 日)。「住宅救済抽籤」(『東亜日報』, 1922 年 7 月 19 日)。
- 120) 「病んで亀裂していく独立門をなおそう」(『毎日申報』, 1928 年 5 月 24 日)。
- 121) 「独立門改築」(『東亜日報』, 1928 年 8 月 20 日)。「独立門修築」(『毎日申報』, 1928 年 8 月 20 日)。
- 122) 「独立門電車来月一日から運転」(『東亜日報』, 1935 年 9 月 30 日)。
- 123) 「独立門改築」(『東亜日報』, 1928 年 8 月 20 日)。「独立門修築」(『毎日申報』, 1928 年 8 月 20 日)。
- 124) 「宗教課にて草案完了, 古蹟と宝物保存令」(『東亜日報』, 1931 年 6 月 9 日)。「園丘壇は宝物となり, 独立門は古蹟として」(『東亜日報』, 1935 年 8 月 9 日)。
- 125) 藤田亮策「朝鮮の古蹟と天然記念物」(『朝鮮及満州』第 346 号, 1936 年, 33 ページ)。
- 126) 渡辺豊日子「朝鮮 宝物古蹟名勝天然記念物保存令の發布に就て」(『朝鮮』220, 1933 年 9 月, 88 ページ)。
- 128 (128)

ジ）。

- 127) 藤田亮策, 前掲論文, 33 ページ。
- 128) 鳥居龍蔵『鳥居龍蔵全集』第 12 巻, 朝日新聞社, 1975-77 年, 538-539 ページ。
- 129) 同上, 538 ページ。
- 130) 同上, 539 ページ。
- 131) 趙景達, 前掲書, 58 ページ。
- 132) 同上, 58-77 ページ。
- 133) 仲摩照久 編『日本地理風俗大系』第 16 巻, 新光社, 1930 年, 86 ページ。
- 134) 『京城案内』京城協賛会, 1914 年, 250 ページ。
- 135) 『京城案内』京城府教育会, 1925 年, 65 ページ。
- 136) 小熊英二『「日本人」の境界』新曜社, 1998 年, 163 ページ。
- 137) 鳥居龍蔵, 前掲書, 538 ページ。

（金 容賛, 立命館大学国際関係学部非常勤講師）

A Study of the Transition of “Symbol” Concerning Nationalism in Modern Korea: The Independence Arch after the end of the Independence Club

What does the word “independence” mean in the Korean peninsula? Can this “independence” be explained in the same way as “freedom and independence” from domination by the Empire of Japan? If so, does the word “independence” refer to a unique condition which did not exist in Korean peninsula before the annexation of Japan and Korea? In order to answer this question, this paper focuses on the Independence Arch, existing as a monument commemorating “independence.” Including when, by whom, and why it was built, and why and by whom has it been maintained during the changes of political situations until now, all aspects of the Independence Arch were investigated to extrapolate the various meanings of “independence” contained in it. As a result, it was proved that the following four meanings of “independence” were represented in the Independence Arch. Firstly, there is the “Sovereign independence,” which existed as the slogan of the Independence Club and Soh Jaipil. Secondly, there is the “Independence by support” advocated by Iljinhoe, who carried out political activities with the support of the Japanese government. Thirdly, there is the “Independence for freedom” of the March 1st Movement, appealing for release from colonial rule. Fourthly, there is “Independence for restoration” which made the justification of Japan-Korea annexation and colonial rule possible. In this way, it has been revealed that different forms of “independence,” according to the changes of political situations, have used Independence Arch as their symbol. Different explanations may be possible even when using the same word, “independence,” when the political positions and situations are different.

(KIM, Yong Chan, Part time lecturer, College of International Relations, Ritsumeikan University)